

# 平塚発、虎御前

櫻井衣里子



櫻井衣里子（プロフィール）……  
平塚江南高校卒。お茶の水女子大学卒。同大学院博士前期課程修了。元平塚市市民アナウンサー。現在、横浜山手女子中学高等学校講師。



曾我・城前寺

曾我十郎、五郎兄弟が一九三三年五月二十八日、富士の裾野で父の敵である工藤祐経を討った事件は人々を震撼させた。兄弟は伊豆河津に生まれ、父の死後、母の再婚によって曾我祐信のもとで育てられることとなる。「敵の首を取りて我に見せよ」との母の言は、幼少の頃から兄弟の心に刻み込まれていながらもかわらぬ、後に母は「源頼朝の統治する今となっては、敵討ちなどあきらめて妻でも娶りなさい。」と、態度を一変させる。が、敵持つ身として妻を迎えることもできぬ十郎は、敵に関する情報を収集する目的で街道沿いの宿を渡り歩く。そこで、恋人となる大磯宿の遊女、虎御前と出逢う。十郎二十歳、虎十七歳の頃である。

いずれにせよ、虎は平塚出生の女性として人々に認識されていた。さらに、鎌倉期の史書『吾妻鏡』には、敵討ち後に源頼朝による喚問をうけ、後に箱根別当行実坊において十九歳で出家して信濃の善光寺に赴いたと記載される。  
「虎」という名は、一見奇妙に感じられるが、生まれ年の干支に因んだ名づけは珍しいことではなかった。なかでも寅年生まれの者は神秘的な力を持つと考えられ、『撰合邦辻』に四寅生まれの女性の肝臓の生き血が、毒による病に効くという。出征兵士への千人針も寅年生まれの女性に年の数だけ縫ってもらうと効果が高いとされた。鎌倉幕府四代將軍の藤原頼経も幼名三寅であり、上杉謙信も虎千代、加藤清正も虎之助であった。女性では寅女、虎王女、虎姫などがいた。また寅の刻は神が降臨する時刻で、丑寅（良）の方角は鬼門であるとされてきたのも興味深い。  
尼となった虎御前は、善光寺に兄弟の骨を納めた後、彼等の菩提を弔うために諸国を行脚する。富士の裾野では兄弟が御霊神として祀られていることを知り、そこの大木の梢に神となった十郎の声を聞く。御霊神とは、非業の死を遂げた者が怨霊となってタタリを起さぬよう、神として祀りあげたものである。敵討の神にあやかるうと、大石内蔵助も箱根を参拝したらしい。最終的に虎は曾我の里で、しだれ桜の小枝に現れた十郎に近寄

ろうとして転び、病づいて六十四歳で大往生を遂げる。大磯高麗山にて晩年を過ごしたともいわれるが、ともかく虎の死をもって物語が終結するほど彼女は重要視されていた。

民俗学的には、トラ・トウロといった名を持つ女性宗教者が全国各地を遊行して各地に虎御前の足跡を残したと説明される。兄弟の死後から怨霊鎮めのために曾我の語りを行っていた箱根の修験比丘尼たちの姿には、箱根で出家した大磯の虎が投影されているという指摘もある。箱根、伊豆、大磯高麗山は、当時非常に強く結びついていた。

ところで、平塚や大磯の地域性は虎誕生とどう関わりあうのか。『更級日記』で「もろこしが原に、やまとなでしこ」が咲いていたと人々が興味をひかれた唐が原は、異国性を有する空間であった。平安期成立の『永久百首』に「なにしおはばとらやふすらん東路にあるといふなるもろこしの原」と詠われているのははじめとして、「もろこし」はトラを導き出す語として機能する。その上、大磯は異国から渡来する人々や神の寄りつく地であった。また「箱根山縁起并序」にあるように、高麗山には高麗の神が祀られていると考えられていた。こうした「もろこし」性がトラという語をひき出してきた可能性もある。



箱根・五輪塔 俗称 曾我兄弟・虎御前の墓

曾我伝承は、民間宗教のほか、幸若舞や歌舞伎などの芸能面でも発展を遂げ、さらには地域レベルでも生成され続けた。貞女であった虎が変化したといわれる虎が石は、美男子にしか持ち上げられない好色な力石として語り変えられていく。『東海道中膝栗毛』の弥次さん北（喜多）さんも虎が石を詠み、広重も路傍のトラ子石を描いた。また『東海道五十三次』「大磯」では虎が雨（五月二十八日に降る虎の涙雨）が題材にされ、小林一茶も虎が雨を句に詠み込んだ。さらに、十郎は虎への執着で成仏できずに亡霊になった一方で、五郎は武田信玄として生まれ変わったともまことしやかに伝えられる。曾我兄弟と虎の墓は箱根だけでなく、大分や鹿児島にまで分布する。虎がかけた橋や十郎の姿を映した虎が池、そのほか虎の死した地とされる虎御前山、虎による供養塔などは東北から九州にまで残る。全国に分布する虎の伝説や史跡は、各地を歩いたトラが残したものであると同時に人々の心が創出した記念碑でもある。平塚生まれの虎御前が、夥しい数の媒介者や賛同者を得て、千里を駆けて全国にその足跡を残したことは、実に驚異的であるというほかない。